

## 「少年の日の思い出」テスト問題

【一】本文について、設問に答えよ。

客は夕方の散歩から帰って、私の書斎で私のそばに腰かけていた。昼間の明るさは消えうせようとしていた。窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。ちょうど、私の末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、私たちは子どもや幼い日の思い出について話し合った。

「子どもができてから、自分の幼年時代のいろいろの（ア）シユウカンや楽しみごとがまたよみがえってきたよ。それどころか、一年前から、ぼくはまた、チヨウチヨ集めをやっているよ。お目にかけてよか。」と私は言った。

彼が見せてほしいと言ったので、私は収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、私はランプを取ってマツチを擦った。すると、①たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓いつぱいに不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。

私のチヨウチヨは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。私たちはその上に体をかがめて、美しい形や濃いみごとな色を眺め、チヨウの名前を言った。

「これはワモンキシタバで、ラテン名はフルミネア。ここらではごく珍しいやつだ。」と私は言った。

友人は一つのチヨウを、ピンの付いたまま、箱の中から用心深く取り出し、羽の（イ）ウラガワを見た。

「②妙なものだ。チヨウチヨを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない。ぼくは小さい少年の頃熱情的な収集家だったものだ。」と彼は言った。

そしてチヨウチヨをまたもとの場所に刺し、箱の蓋を閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。その直後、私が箱をしまつて戻ってくる、彼は微笑して、巻きたばこを私に求めた。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。「きみの収集をよく見なかったけれど。ぼくも子どもの時、むろん、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出を汚してしまった。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

彼はランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。すると、私たちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。私は葉巻を吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。友人はその間に次のように語った。

ぼくは、八つか九つの時、チヨウチヨ集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただはやりだったのだ、やっていたまでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度めの夏には、ぼくは全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため他のことはすっかりすっぱかしてしまったので、みんなは何度も、ぼくに③それをやめさせなければならぬまい、と考えたほどだった。チヨウを採りに出かける、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。休暇になると、パンを一きれ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

今でも美しいチヨウチヨを見ると、おりおりあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、ぼくはしばしの間、子どもだけが感じることで、あのなんともいえず、貪るような、うっとりした感じに襲われる。少年の頃、初めてキアゲハに忍び寄った、あの時味わった気持ちだ。また、そういう場合、ぼくはすぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべることができるのだ。強くにおう乾いた荒野の焼きつくような昼下がりが、